

青森県における「学校に対する心理的支援」に関する実態調査、 および、ニーズ調査 II —小学校編—ⁱ

Actual conditions and needs of psychological support for schools in Aomori prefecture: a survey research in primary schools

安 達 知 郎*

Tomoo ADACHI*

要旨

本研究の目的は、青森県の小学校に適した心理的支援の在り方を探索するための基礎資料として、青森県内の小学校に対する心理的支援の実態（認知度、経験）、および、それに対するニーズ（必要性認知）を調査することであった。青森県内の小学校全312校を対象として郵送法で質問紙調査を実施し、202校から回答を得た。結果、①心理的支援の認知度は、心理・社会面でやや高かった。地域間比較では、学習面、心理・社会面、進路面、いずれについても、概ね、東青が西北、上北、三八に比べて有意に高かった、②心理的支援の経験率は、心理・社会面、学習面、進路面の順に高かった。地域間比較では、学習面、心理・社会面で東青が他地域に比べて比較的高かった、③心理的支援の必要性認知は、学習面、心理・社会面、進路面、いずれについても高かったが、とくに心理・社会面で高かったという3点が明らかになった。

キーワード：学校、心理的支援、青森県、小学校、ニーズ

1. 問題と目的

心理的支援はさまざまな領域において行われている。心理的支援の主な担い手である臨床心理士は、その職域として、教育領域、医療・保健領域、福祉領域、司法・矯正領域、労働・産業領域を挙げている。よって、教育領域は心理的支援が行われている代表的な領域のひとつであると考えられる。教育領域における心理的支援は、適応教室における支援などもあるが、その主となるのは学校における支援である。石隈（1999）は、学校における心理的支援において、子どもの学習面、心理・社会面、進路面の3側面に焦点を当てることの重要性を主張した。そして、学習面での支援の対象として、①自分の学習意欲を高める、②勤勉に学ぶ習慣を身につける、③学習面での困難さや遅れに対処する、④自分の学習スタイルや学力などの学習状況を理解する、⑤自分にあった学習スキルを獲

得する、⑥自分にあった学習計画を立てるという6つの問題を挙げた。また、心理面での支援の対象としては、①自分の考え・感情・行動を理解する、②自分に対する効力感（自信）を獲得し、向上させる、③ストレスに対処する、④ストレス対処法を獲得する、⑤情緒的な苦悩を軽減するという5つの問題を、社会面での支援の対象として、①友人・教師・家族との人間関係の状況を理解する、②学級集団や友人のグループに適応する、③対人関係の問題を解決する、④対人関係スキルを獲得するという4つの問題を挙げた。さらに、進路面での支援の対象として、①自分の進路適性を理解する、②自分の進路について検討するスキルを身につける、③自分の進路決定における迷いや不安に対処する、④自分の進路決定における家族や教師の意見に対処する、⑤自分の夢と現実（自分の適性、職場状況）のずれに対処するという5つの問題を挙げた。

日本の学校における心理的支援は、1995年のスクー

*弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室
Center for Clinical Psychology, Graduate school of Education, Hirosaki University.

ルカウンセラー活用調査研究委託事業によって、大きな変化を遂げた。1995年以降、学内の教員だけで担われていた心理的支援の一部が、学外の心理専門家であるスクールカウンセラーによっても担われるようになった（以下、本研究では、学内の教員による支援と学外の心理専門家による支援を区別し、後者を「学校に対する心理的支援」と呼ぶ）。スクールカウンセラー配置校は年々増加し、1995年に154校であったのが2013年には20,310校となった（文部科学省、2014）。このように順調に学校に対する心理的支援が拡大する一方で、新たな動きも生じつつある。ひとつは、学校教育の変化である。文部科学省（2015）は、「チーム学校」実現の視点のひとつとして、心理専門スタッフの学校での位置づけを明確にし、心理専門スタッフを法令に位置づけることを挙げた。つまり、今後、学校に対する心理的支援がこれまで以上に学校現場で重視されていくと考えられる。もうひとつは、心理職の立場の変化である。2015年9月、いわゆる、公認心理師法案が参議院で可決され、成立した。これに伴い、近い将来、心理職は国家資格化され、心理職はこれまで以上に国民の健康増進の社会的期待、責務を担うことが求められる。以上のように、学校に対する心理的支援を取り巻く状況が変化しつつある中で、学校に対する支援の新たな在り方を探索することが重要であると考えられる。

新たな支援の在り方を探索するためには、心理的支援に対するニーズがどのようなものであるのかを明確化することが重要である。学校に対する心理的支援についても、これまで数多くの実態調査、ニーズ調査が行われてきた。ここでは、小学校に対する心理的支援に関する実態調査、ニーズ調査の結果の詳細を述べる。石隈（1999）は、小学校、中学校、高校の子ども、教員、保護者を対象として、学校における心理的支援を学習面（中学生9項目、高校生9項目、教員12項目、保護者9項目）、心理・社会面（中学生11項目、高校生10項目、教員13項目、保護者9項目）、進路面（中学生8項目、高校生9項目、教員10項目、保護者7項目）の3側面に分け、それぞれの面の心理的支援についてスクールカウンセラーの必要性などを調査した。石隈（1999）は、子どもについては中学生、高校生を、教員、保護者については小学校、中学校、高校の教員、保護者を調査対象としているが、ここでは、小学校に関する結果のみを述べる。小学校教員326名に調査した結果、心理・社会面の支援が学習面、進路面に比べて相対的にスクールカウンセラーの必要性が高かつ

た。小学生の保護者1197名に調査した結果も、教員を対象とした調査の結果と同様に、心理・社会面の支援が学習面、進路面に比べて相対的にスクールカウンセラーの必要性が高かった。また、中島ら（1997）は、小学校の教員274名、中学校の教員152名を対象としてスクールカウンセラーに対する期待を活動、知識、資質という3側面から調査した。結果、小学校、中学校ともに、活動では直接的援助（カウンセリングなど）、間接的援助（研修会の開催、専門機関との連携など）、媒体による援助（心理検査など）、進路・学習指導の順に、知識では臨床心理（心理療法、心理検査などについての知識）、関係づくり（教員と子ども、保護者との間の関係づくりなどの知識）、教育・教育心理（教材研究、教授法などの知識）の順で、資質では関係性（教員への理解など）、臨床の専門性（心理療法の経験など）、コミュニティ（地域の風土・校風への理解など）、教員経験・免許の順に得点平均が高かった。これらの結果から、小学校に対する心理的支援については、心理・社会面の支援、つまり、臨床心理学的支援に対するニーズが高い一方で、学習面、進路面の支援に対するニーズは比較的低いと考えられる。

健康保険制度により全国一律のサービスが提供される医療とは異なり、学校に対する心理的支援については、それに及ぼす学校独自の要因（受け入れ体制、組織の機能、教員の意欲など）の重要性が明らかにされている（伊藤1999）。学校要因はその学校がある地域の影響（地域特性、自治体の教育行政方針など）を強く受けることが予想される。よって、効果的な心理的支援を学校に提供していくためには、それぞれの地域における心理的支援の現状、および、それに対するニーズを明らかにすることが重要である。

上記した石隈（1999）、中島ら（1997）は青森県を対象とした調査ではない。また、教員個人を対象とした調査であり、各学校、各地域の多様性をそこから読み取ることはできない。青森県における調査としては、教員を対象として心理教育の実態調査を行った安達（2015）がある。心理教育は学校における心理的支援の一部でしかなく、青森県の小学校における、あるいは、青森県の小学校に対する心理的支援の全体像はこれまで明らかにされていない。そこで、本研究では、今後、青森県の小学校に適した心理的支援の在り方を探索するための基礎資料として、青森県内の小学校に対する心理的支援の実態（認知度、経験）、および、それに対するニーズ（必要性認知）を調査することを目的とする。ただし、本研究では地域特性の多様

性を読み取るため、調査は学校単位で行うとともに、分析は地域単位（東青、中南、西北、下北、上北、三八の6地域）で行うこととする。

2. 方法

(1) 調査対象校

調査対象校は、青森県内の小学校全312校（分教室含む）（東青54校、中南65校、西北43校、下北22校、上北54校、三八74校）であった。回答は、「相談業務をとりまとめている先生」に依頼した。

(2) 調査時期

2015年2月から3月に実施した。

(3) 手続き

郵送法で調査対象校に質問紙調査を依頼した。回答期間は約1ヶ月であった。回答に際しては、回答は任意であること、データは統計的に分析することなどを書面で説明した。

(4) 調査内容（本研究に関するもののみ）

①フェイスシート

学校について、学校種、在籍する子どもの数、在籍する教職員数、所在地、設立主体を、回答者について、職位、年齢、性別、教員歴、現在の所属校での勤続年数を尋ねた。

②現在受けている心理的支援の概要

現在、定期的に心理的支援を受けているかどうか（2件法）、受けている場合は頻度、心理専門家の保有資格、心理専門家の職種を尋ねた。頻度、心理専門家の保有資格、心理専門家の職種については、複数から支援を受けている場合に鑑み、回答欄を3個、設けた。

③「学校に対する心理的支援」についての認知度

学校において心理的支援が実際に行われる35場面（学習面：12場面、心理・社会面：13場面、進路面：10場面。詳細は表1）（石隈，1999）を挙げ、そういった支援があることをどれくらい知っていたかを5件法（「1. 全く知らなかった」～「5. とても知っていた」）で尋ねた。ただし、認知度については、回答者個人の立場での回答を求めた。

④「学校に対する心理的支援」についての経験

認知度を尋ねた際に用いた35場面を挙げ、それぞれの場面での支援をここ3年間、受けたことがあるかどうか（2件法）を尋ねた。

⑤「学校に対する心理的支援」についての必要性認知

認知度を尋ねた際に用いた35場面を挙げ、それぞれの場面での支援をどれくらい必要と感じているかを5

件法（「1. 全く必要ない」～「5. とても必要である」）で尋ねた。

⑥定期的な心理的支援に対するニーズ

今後、心理の専門家による「学校に対する心理的支援」を定期的に受けたいかを5件法（「1. 全く思わない」～「5. とても思う」）で尋ねた。

3. 結果

分析には SPSS ver22.0を用いた。分析に際しては、分析ごとに欠損値のあるデータを除外した。

(1) 分析対象校

回答を得た小学校202校（東青29校、中南51校、西北29校、下北13校、上北39校、三八41校）（回収率は全体で64.74%、東青53.70%、中南78.46%、西北67.44%、下北59.09%、上北72.22%、三八55.41%）を分析対象とした。

(2) 質問項目への回答

①フェイスシート（学校、回答者）

分析対象校に在籍する子どもの平均は212.89名（標準偏差169.61）、教職員の平均は19.48名（標準偏差8.70）であった。また、設立主体はすべて国公立であった。

回答者の主な職位は教頭であった（詳細は表2参照）。性別は男性144名、女性56名、回答なし2名であった。平均年齢は52.02歳（標準偏差4.21）、平均教員歴は28.11年（標準偏差5.33）、現在の所属校での平均勤続年数は2.60年（標準偏差3.10）であった。

②現在受けている定期的な心理的支援の概要

現在、定期的に心理的支援を受けているかどうか、および、その地域間比較（ χ^2 検定、下位検定は残差分析）の結果を表3に示す。

現在、心理的支援を受けている小学校は63校であった。地域間比較では、東青、下北において、支援有が多く、支援無が少なかった。

定期的に心理的支援を受けている小学校がどれくらいの頻度で支援を受けているかを表4に示す。

支援を受けている小学校の約半分が、隔週以上毎週未満の頻度で心理的支援を受けていた。

定期的に心理的支援を行っている支援者が保有している資格を表5に示す。

支援者が保有している資格では、臨床心理士、教育カウンセラーが多かった。

支援者の職種を表6に示す。

支援者の職種はほとんどがスクールカウンセラーで

表1 質問項目の詳細

学習面	1	学習面（以下の2-12）の指導内容に関して、教材研究・教材作成をするとき
	2	子ども一人ひとりの興味・関心に合わせた指導法を考えると
	3	子ども一人ひとりの能力・学力に合わせた指導法を考えると
	4	子どもの主体性を生かす授業のあり方を考えると
	5	子どもが満足する授業の方法について考えると
	6	学習意欲の低い子どもへの対応を考えると
	7	授業中の学習態度のよくない子どもへの対応を考えると
	8	授業についてこれない子どもへの対応を考えると
	9	心身に障害をもつ子どもの学習指導について考えると
	10	学習について援助を必要とする子どもがいて、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように連携したらよいか分からないとき
	11	学習について援助を必要とする子どもの保護者とどのように関わったらよいか分からないとき
	12	学習について援助を必要とする子どもがいて、児童相談所、相談機関、病院などの専門機関とどのように関わったらよいか分からないとき
心理・社会面	1	学級活動・ホームルーム活動を活性化させるための方法を知りたいとき
	2	部活動・生徒会活動・学校行事を通して子どもを生かすためにどんな指導をしてよいか分からないとき
	3	友人関係がうまくいかない、あるいは友だちがいないということで悩んでいる子どもへの対応について考えると
	4	登校拒否（不登校）の子どもへの対応について考えると
	5	無届の欠席や遅刻・早退が多くて気になる子どもへの対応について考えると
	6	心に悩みをもつ子どもへの対応について考えると
	7	言葉や服装・頭髪の乱れている子どもへの対応について考えると
	8	問題行動をおこなっている子どもへの対応について考えると
	9	性の問題や異性ととの交際のことで悩みをもっている子どもへの対応について考えると
	10	家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応について考えると
	11	心理・社会面で援助を必要とする子どもがいて、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように連携したらよいか分からないとき
	12	心理・社会面で援助を必要とする子どもの保護者とどのように関わったらよいか分からないとき
	13	心理・社会面で援助を必要とする子どもがいて、児童相談所、相談機関、病院などの専門機関とどのように関わったらよいか分からないとき
進路面	1	子どもの興味・関心から進路を考えると
	2	子どもの進路についての関心を高めたいとき
	3	入学試験・就職試験のための勉強法がまったく分からない子どもへの指導に困っているとき
	4	心身に障害があるために将来の進路に不安をもつ子どもがいて
	5	問題行動をおこなっている子どもへの進路指導に困っているとき
	6	不登校・心に悩みをもつ子どもへの進路指導に困っているとき
	7	将来の進路について教師の考えと子どもの考えが一致しないとき
	8	将来の進路について子どもの考えと保護者の考えが一致しないとき
	9	将来の進路について教師の考えと保護者の考えが一致しないとき
	10	子どもの進路について、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように連携したらよいか分からないとき

表2 回答者の職位

職位	回答数
教頭	157
養護教諭	4
生徒指導主任	3
教育相談担当，特別支援コーディネーター，保健主事	3
校長	2
教諭	29
合計	198

表4 定期的な心理的支援の頻度

	地域							合計
	東青	中南	西北	下北	上北	三八		
毎年～	1	1	1	1	1	1	6	
隔月～		2	1	2			5	
毎月～	2	5		3	1	1	12	
隔週～	10	4	1	2	6	7	30	
毎週～	1		3			1	5	
週2回～			3		2		5	
毎日～							0	
合計	14	12	9	8	10	10	63	

表3 定期的な心理的支援の有無

	地域							χ ² 検定	
	東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計	χ ² 値	残差分析
支援有	14	12	9	8	10	10	63	12.36*	△：東青(有) 下北(有)
支援無	15	39	20	5	29	31	139		▽：東青(無) 下北(無)
合計	29	51	29	13	39	41	202		

*p<.05

△：期待値に比べ有意に多い，▽：期待値に比べ有意に少ない

あった。

③「学校に対する心理的支援」の認知度

「学校に対する心理的支援」の認知度の学習面、心理・社会面、進路面、それぞれの全項目得点の平均値、標準偏差および、その地域間比較（分散分析、多重比較は Tukey HSD 法）の結果を表7に示す。

学習面、心理・社会面、進路面、いずれについても、得点平均は3.00以上であった。心理・社会面では得点平均が3.73であり高かった。また、地域間比較では、学習面、心理・社会面、進路面、いずれについても、有意差が見られた。多重比較の結果、いずれについても、概ね、東青が三八に比べ、認知度が高かった。

以下、学習面、心理・社会面、進路面の各質問項目について、平均値が2.00以下、4.00以上、あるいは、その地域間比較（分散分析、多重比較は Tukey HSD

法）の結果が有意であったものの記述統計量、検定結果を表8に示す。

学習面については、得点平均が2.00以下で低い項目は見られなかった。一方で、心身に障害をもつ子どもへの学習指導（項目9）に関する項目で、得点平均が4.00以上で高かった。地域間比較では、教材研究・教材作成（項目1）、子どもの興味・関心に合わせた指導法（項目2）、子どもの能力・学力に合わせた指導法（項目3）、子どもの主体性を生かす授業（項目4）、子どもが満足する授業の方法（項目5）、学習援助を必要とする子どもについての保護者との連携（項目11）に関する項目で有意差が見られた。多重比較の結果、概ね、東青、中南が上北に比べ、認知度が高かった。

心理・社会面については、得点平均が2.00以下で低い項目は見られなかった。一方で、不登校の子どもへの対応（項目4）、欠席・遅刻・早退が多い子どもへの

表5 支援者の保有資格

	地域						合計
	東青	中南	西北	下北	上北	三八	
臨床心理士	3	3	2		5	3	16
教育カウンセラー（初級，中級，上級）	6	2		2	2	1	13
ガイダンスカウンセラー	2	2		1	1		6
教員免許（特別支援，2種を含む）				2	1	1	4
認定心理士		1		1			2
学校心理士		1		1			2
家族相談士		2					2
臨床発達心理士				2			2
精神保健福祉士				2			2
ピア・サポート・コーディネーター					1		1
その他（心理療法士など）		1		2	1		4
もっていない			3		1	2	6
わからない	2	6	4	3	2	4	21
合計	13	18	9	16	14	11	81

表6 支援者の職種

	地域						合計
	東青	中南	西北	下北	上北	三八	
スクールカウンセラー	10	9	9	8	9	8	53
スクールソーシャルワーカー	2				1		3
学びの協力員		3					3
教育相談員			1		2		3
スクールカウンセリングアドバイザー	1						1
県職員						1	1
教育センター職員						1	1
合計	13	12	10	8	12	10	63

表7 「学校に対する心理的支援」の認知度の概要

		地域							分散分析	
		東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計	F値	多重比較
認知度	n	28	49	28	12	37	41	195	3.20**	上北, 三八<東青
学習面	平均値	3.68	3.35	3.16	3.50	2.96	3.03	3.24		
<平均>	標準偏差	.75	.87	.97	.72	.77	.89	.87		
認知度	n	29	50	29	13	38	40	199	3.12**	中南, 西北, 三八<東青
心理・社会面	平均値	4.19	3.64	3.47	4.01	3.76	3.59	3.73		
<平均>	標準偏差	.53	.85	.97	.79	.85	.79	.84		
認知度	n	27	50	29	13	38	41	198	2.79*	三八<東青
進路面	平均値	3.56	3.08	2.94	3.23	2.97	2.77	3.05		
<平均>	標準偏差	.79	.85	.98	.60	1.06	.90	.92		

* $p < .05$, ** $p < .01$

対応（項目5）、心に悩みをもつ子どもへの対応（項目6）、問題行動をおこしている子どもへの対応（項目8）に関する項目で、得点平均が4.00以上で高かった。地域間比較では、集団活動への支援（項目1, 2）、友人関係で悩んでいる子どもへの対応（項目3）、家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応（項目10）、心理・社会面で援助を必要とする子どもについての教員間の連携（項目11）、心理・社会面で援助を必要とする子どもについての保護者との連携（項目12）、心理・社会面で援助を必要とする子どもについての専門機関との連携（項目13）に関する項目で有意差が見られた。多重比較の結果、概ね、東青が西北、三八に比べ、認知度が高かった。

進路面については、得点平均が2.00以下で低い項目、および、4.00以上で高い項目は見られなかった。地域間比較では、子どもの興味・関心から進路を考えると（項目1）、子どもの進路についての関心を高めたいとき（項目2）、将来の進路について教員と子どもとの考えが一致しないとき（項目7）、将来の進路について子どもと保護者との考えが一致しないとき（項目8）、将来の進路について教員と保護者の考えが一致しないとき（項目9）、子どもの進路についての教員間の連携（項目10）に関する項目で有意差が見られた。多重比較の結果、概ね、東青が西北、上北、三八に比べて、認知度が高かった。

④「学校に対する心理的支援」についての経験

「学校に対する心理的支援」についての経験の学習面、心理・社会面、進路面、それぞれの全項目度数の平均値を表9に示す。

経験有の度数の平均値は学習面で29.83、心理・社会面で39.46、進路面で10.10であった。

以下、学習面、心理・社会面、進路面の各質問項目について、経験率が.05以下、.20以上、および、その

地域間比較（ χ^2 検定、下位検定は残差分析。期待度数が5以下のセルが20%以上ある場合はFisherの直接法、多重比較はFisherの直接法、Bonferoni法）の結果が有意であったものの度数、検定結果を表10に示す。

学習面については、経験率が.05以下で低い項目は見られなかった。一方で、授業態度がよくない子どもへの対応（項目7）、心身に障害をもつ子どもへの学習指導（項目9）、学習援助を必要とする子どもについての保護者との連携（項目11）に関する項目で経験率が.20以上で高かった。地域間比較では、学習援助を必要とする子どもについての保護者との連携（項目11）に関する項目で有意差が見られた。下位検定の結果、青東において、支援有が多く、支援無が少なかった。

心理・社会面については、経験率が.05以下の項目は見られなかった。一方で、友人関係で悩んでいる子どもへの対応（項目3）、不登校の子どもへの対応（項目4）、欠席、遅刻、早退が多い子どもへの対応（項目5）、心に悩みをもつ子どもへの対応（項目6）、問題行動をおこしている子どもへの対応（項目8）、家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応（項目10）に関する項目で経験率が.20以上で高かった。地域間比較では、心に悩みをもつ子どもへの対応（項目6）、性的問題に悩んでいる子どもへの対応（項目9）に関する項目で有意差が見られた。下位検定の結果、心に悩みを持つ子供への対応（項目6）に関する項目で、東青、下北において、支援有が多く、支援無が少なかった。また、中南において、支援無が多く、支援有が少なかった。

進路面については、子どもの興味・関心から進路を考えると（項目1）、子どもの進路についての関心を高めたいとき（項目2）、入学試験・就職試験の勉強法がまったく分からない子どもへの指導（項目3）、将来

表8 「学校に対する心理的支援」の認知度の詳細

		地域						分散分析			
		東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計	F値	多重比較	
学習面	認学1 学習面(以下の2-12)の指導内容に関して、教材研究・教材作成をするとき	n	29	51	29	13	39	41	202	4.81***	上北、三八<東青、上北<中南
		平均値	2.97	2.69	2.31	2.54	1.95	2.10	2.40		
		標準偏差	1.09	1.01	1.17	.88	.94	1.04	1.08		
	認学2 子ども一人ひとりの興味・関心に合わせた指導法を考えると	n	29	51	29	12	39	41	201	5.19***	上北<東青、中南、西北
		平均値	3.21	3.14	2.90	3.08	2.05	2.63	2.80		
		標準偏差	1.11	1.10	1.35	1.24	1.00	1.24	1.22		
	認学3 子ども一人ひとりの能力・学力に合わせた指導法を考えると	n	29	51	29	12	39	41	201	5.41***	上北<東青、中南、西北、下北
		平均値	3.34	3.12	2.93	3.25	2.10	2.63	2.84		
		標準偏差	1.17	1.09	1.36	1.22	1.05	1.18	1.22		
	認学4 子どもの主体性を生かす授業のあり方を考えると	n	29	51	28	12	38	41	199	6.28***	上北<東青、中南、下北三八<東青
		平均値	3.17	2.88	2.75	3.25	1.97	2.29	2.63		
		標準偏差	1.23	1.05	1.27	.97	1.03	1.03	1.17		
	認学5 子どもが満足する授業の方法について考えると	n	29	51	28	12	39	41	200	4.31**	上北<東青、中南
		平均値	3.21	3.00	2.71	3.08	2.15	2.49	2.73		
		標準偏差	1.21	1.04	1.24	1.16	1.06	1.12	1.17		
認学9 心身に障害をもつ子どもの学習指導について考えると	n	29	50	29	12	39	41	200	1.60		
	平均値	4.41	3.90	4.10	4.17	4.05	3.83	4.04			
	標準偏差	.68	.95	1.08	.83	.89	1.07	.95			
認学11 学習について援助を必要とする子どもの保護者などのように関わったらよいか分からないとき	n	29	51	29	12	39	41	201	3.00*	西北、三八<東青	
	平均値	4.24	3.75	3.38	4.00	3.90	3.46	3.75			
	標準偏差	.64	.93	1.32	1.04	1.05	1.12	1.06			
心理・社会面	認心1 学級活動・ホームルーム活動を活性化させるための方法を知りたいとき	n	29	50	29	13	39	41	201	3.75**	上北、三八<東青
		平均値	3.17	2.88	2.48	3.31	2.31	2.32	2.67		
		標準偏差	1.17	1.22	1.30	1.11	1.15	1.08	1.22		
	認心2 部活動・生徒会活動・学校行事を通して子どもを生かすためにどんな指導をしてよいか分からないとき	n	29	51	29	13	39	40	201	2.59*	
		平均値	2.90	2.78	2.45	3.23	2.26	2.35	2.59		
		標準偏差	1.14	1.10	1.24	1.24	1.16	1.12	1.18		
	認心3 友人関係がうまくいかない、あるいは友だちがいないということで悩んでいる子どもへの対応について考えると	n	29	51	29	13	39	41	202	2.42*	三八<東青
		平均値	4.41	3.88	3.76	4.31	4.03	3.73	3.97		
		標準偏差	.63	.97	1.18	.85	.96	1.03	.98		
	認心4 登校拒否(不登校)の子どもへの対応について考えると	n	29	51	29	13	39	41	202	1.97	
		平均値	4.62	4.08	4.00	4.31	4.26	4.10	4.20		
		標準偏差	.56	.84	1.13	.85	.85	.97	.90		
	認心5 無届の欠席や遅刻・早退が多くて気になる子どもへの対応について考えると	n	29	51	29	13	39	41	202	1.87	西北<東青、下北、上北
		平均値	4.38	3.90	3.69	4.23	4.18	3.93	4.02		
		標準偏差	.78	1.02	1.28	.83	.91	1.06	1.02		
認心6 心に悩みをもつ子どもへの対応について考えると	n	29	51	29	13	38	41	201	1.63	西北<下北	
	平均値	4.52	4.00	4.14	4.38	4.32	4.12	4.20			
	標準偏差	.51	.92	1.03	.87	.84	.95	.88			
認心8 問題行動をおこしている子どもへの対応について考えると	n	29	51	29	13	38	41	201	1.66	西北<下北、上北	
	平均値	4.48	3.94	3.86	4.31	4.16	4.10	4.10			
	標準偏差	.57	.99	1.19	.85	1.05	.97	.98			
認心10 家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応について考えると	n	29	51	29	13	38	41	201	2.67*	西北<東青	
	平均値	4.41	3.73	3.62	4.38	4.03	3.95	3.96			
	標準偏差	.63	1.02	1.32	.87	1.17	1.02	1.07			
認心11 心理・社会面で援助を必要とする子どもがいて、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように連携したらよいか分からないとき	n	29	51	29	13	38	41	201	3.77**	西北、三八<東青	
	平均値	4.31	3.61	3.14	3.85	3.84	3.54	3.69			
	標準偏差	.66	1.02	1.25	1.21	1.24	1.12	1.13			
認心12 心理・社会面で援助を必要とする子どもの保護者などのように関わったらよいか分からないとき	n	29	51	29	13	38	41	201	3.12**	中南、西北、三八<東青	
	平均値	4.45	3.78	3.59	4.08	4.05	3.71	3.91			
	標準偏差	.63	.92	1.15	1.12	1.09	.98	1.01			
認心13 心理・社会面で援助を必要とする子どもがいて、児童相談所、相談機関、病院などの専門機関とどのように関わったらよいか分からないとき	n	29	51	29	13	38	41	201	2.48*	西北<東青	
	平均値	4.31	3.82	3.41	4.15	4.03	3.80	3.89			
	標準偏差	.76	1.01	1.27	1.14	1.17	.98	1.08			
進路面	認進1 子どもの興味・関心から進路を考えると	n	28	51	29	13	38	41	200	2.78*	上北、三八<東青
		平均値	3.43	2.82	2.72	2.77	2.61	2.44	2.77		
		標準偏差	1.00	1.07	1.33	.83	1.26	1.10	1.16		
	認進2 子どもの進路についての関心を高めたいとき	n	28	51	29	13	38	41	200	2.93*	上北、三八<東青
		平均値	3.43	2.73	2.69	2.85	2.53	2.44	2.73		
		標準偏差	1.10	.98	1.34	.99	1.20	1.16	1.16		
	認進7 将来の進路について教師の考えと子どもの考えが一致しないとき	n	27	50	29	13	38	41	198	3.83**	西北、三八<東青
		平均値	3.44	3.04	2.55	2.92	2.74	2.41	2.83		
		標準偏差	.93	.97	1.15	.76	1.31	1.07	1.11		
	認進8 将来の進路について子どもの考えと保護者の考えが一致しないとき	n	28	50	29	13	38	41	199	4.35***	西北、上北、三八<東青
		平均値	3.54	3.00	2.55	2.92	2.68	2.41	2.82		
		標準偏差	.96	1.03	1.15	.76	1.28	1.07	1.13		
	認進9 将来の進路について教師の考えと保護者の考えが一致しないとき	n	28	50	29	13	38	41	199	4.16**	西北、上北、三八<東青
		平均値	3.57	2.92	2.55	2.92	2.76	2.41	2.82		
		標準偏差	1.03	1.01	1.21	.76	1.30	1.07	1.15		
認進10 子どもの進路について、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように連携したらよいか分からないとき	n	28	51	29	13	38	41	200	3.27**	三八<東青	
	平均値	3.43	2.84	2.72	3.15	2.68	2.39	2.81			
	標準偏差	.96	1.01	1.13	.90	1.38	1.12	1.15			

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

表9 「学校に対する心理的支援」の経験の概要

		地域						
		東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計
学習面	経験有	7.00	5.58	4.50	2.92	5.50	4.33	29.83
	経験無	22.00	45.42	24.50	8.92	32.42	36.67	169.92
	<合計>	29.00	51.00	29.00	11.83	37.92	41.00	199.75
心理・社会面	経験有	8.85	6.92	5.38	3.23	7.92	7.15	39.46
	経験無	20.08	43.69	23.62	9.38	30.69	33.62	161.08
	<合計>	28.92	50.62	29.00	12.62	38.62	40.77	200.54
進路面	経験有	1.90	.90	1.60	.40	3.00	2.30	10.10
	経験無	26.10	49.10	27.40	12.60	35.00	38.70	188.90
	<合計>	28.00	50.00	29.00	13.00	38.00	41.00	199.00

表10 「学校に対する心理的支援」の経験の詳細

		地域							χ ² 検定		
		東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計	χ ² 値	残差分析	
学習面	経学7 授業中の学習態度のよくない子どもへの対応を考えるとき	経験有	12	9	6	4	10	6	47		
		経験無	17	42	23	8	28	35	153		
		合計	29	51	29	12	38	41	200		
学習面	経学9 心身に障害をもつ子どもの学習指導について考えるとき	経験有	14	13	13	5	13	10	68		
		経験無	15	38	16	7	25	31	132		
		合計	29	51	29	12	38	41	200		
学習面	経学11 学習について援助を必要とする子どもの保護者とのように関わったらよいか分からないとき	経験有	12	7	3	3	9	7	41	11.71**	△:東青(有) ▽:東青(無)
		経験無	17	44	26	9	29	34	159		
		合計	29	51	29	12	38	41	200		
心理・社会面	経心4 登校拒否(不登校)の子どもへの対応について考えるとき	経験有	15	16	15	5	15	13	79		
		経験無	14	34	14	7	23	27	119		
		合計	29	50	29	12	38	40	198		
心理・社会面	経心5 無届の欠席や遅刻・早退が多くて気になる子どもへの対応について考えるとき	経験有	11	7	6	1	14	10	49		
		経験無	18	43	23	11	24	30	149		
		合計	29	50	29	12	38	40	198		
心理・社会面	経心6 心に悩みをもつ子どもへの対応について考えるとき	経験有	16	11	9	9	13	15	73	16.64**	△:東青(有),中南(無),下北(無) ▽:東青(無),中南(有),下北(無)
		経験無	12	40	20	4	26	26	128		
		合計	28	51	29	13	39	41	201		
心理・社会面	経心8 問題行動をおこしている子どもへの対応について考えるとき	経験有	14	13	9	4	17	12	69		
		経験無	15	38	20	9	22	28	132		
		合計	29	51	29	13	39	40	201		
心理・社会面	経心9 性の問題や異性との交際のことで悩みをもっている子どもへの対応について考えるとき	経験有	4	0	0	1	3	4	12	(Fisherの直接法)*	(多重比較では有意差は見られなかった)
		経験無	25	51	29	12	36	37	190		
		合計	29	51	29	13	39	41	202		
進路面	経心10 家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応について考えるとき	経験有	10	7	5	4	7	9	42		
		経験無	19	44	24	9	32	32	160		
		合計	29	51	29	13	39	41	202		
進路面	経進1 子どもの興味・関心から進路を考えるとき	経験有	2	0	1	1	2	1	7		
		経験無	26	50	28	12	36	40	192		
		合計	28	50	29	13	38	41	199		
進路面	経進2 子どもの進路についての関心を高めたいとき	経験有	1	0	1	1	2	1	6		
		経験無	27	50	28	12	36	40	193		
		合計	28	50	29	13	38	41	199		
進路面	経進3 入学試験・就職試験のための勉強法がまったく分からない子どもへの指導に困っているとき	経験有	1	1	0	0	1	1	4		
		経験無	27	49	29	13	37	40	195		
		合計	28	50	29	13	38	41	199		
進路面	経進7 将来の進路について教師の考えと子どもの考えが一致しないとき	経験有	1	0	0	0	2	1	4		
		経験無	27	50	29	13	36	40	195		
		合計	28	50	29	13	38	41	199		
進路面	経進8 将来の進路について子どもの考えと保護者の考えが一致しないとき	経験有	1	0	0	1	2	1	5		
		経験無	27	50	29	12	36	40	194		
		合計	28	50	29	13	38	41	199		
進路面	経進9 将来の進路について教師の考えと保護者の考えが一致しないとき	経験有	1	0	0	0	2	1	4		
		経験無	27	50	29	13	36	40	195		
		合計	28	50	29	13	38	41	199		
進路面	経進10 子どもの進路について、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように連携したらよいか分からないとき	経験有	1	0	0	0	2	1	4		
		経験無	27	50	29	13	36	40	195		
		合計	28	50	29	13	38	41	199		

*p<.05, **p<.01 △:期待値に比べ有意に多い, ▽:期待値に比べ有意に少ない

の進路について教員と子どもの考えが一致しないとき（項目7）、将来の進路について子どもと保護者の考えが一致しないとき（項目8）、将来の進路について教員と保護者の考えが一致しないとき（項目9）、子どもの進路についての教員間の連携（項目10）に関する項目で、経験率が.05以下で低かった。一方で、経験率が.20以上で高い項目は見られなかった。地域間比較では、有意差は見られなかった。

⑤「学校に対する心理的支援」についての必要性認知「学校に対する心理的支援」についての必要性認知の学習面、心理・社会面、進路面、それぞれの全項目得点の平均値、標準偏差、および、その地域間比較（分散分析、多重比較はTukey HSD法）の結果を表11に示す。

学習面、心理・社会面、進路面、いずれについても、得点平均は概ね4.00で高かった。また、地域間比較では、学習面、心理・社会面、進路面、いずれについても、有意差は見られなかった。

以下、学習面、心理・社会面、進路面の各質問項目について、平均値が2.00以下、4.00以上、あるいは、その地域間比較（分散分析、多重比較はTukey HSD法）の結果が有意であったものの記述統計量、検定結果を表12に示す。

学習面については、得点平均が2.00以下で低い項目は見られなかった。一方で、授業態度のよくない子どもへの対応（項目7）、心身に障害をもつ子どもへの学習指導（項目9）、学習支援を必要とする子どもについての保護者との連携（項目11）、学習支援を必要とする子どもについての専門機関との連携（項目12）に関する項目で、得点平均が4.00以上で高かった。地域間比較では、有意差は見られなかった。

心理・社会面については、得点平均が2.00以下で低い項目は見られなかった。一方で、友人関係で悩んでいる子どもへの対応（項目3）、不登校の子どもへの対応

（項目4）、欠席・遅刻・早退が多い子どもへの対応（項目5）、心に悩みをもつ子どもへの対応（項目6）、問題行動をおこしている子どもへの対応（項目8）、性の問題で悩んでいる子どもへの対応（項目9）、家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応（項目10）、心理・社会面で援助を必要とする子どもについての保護者との連携（項目12）、心理・社会面で援助を必要とする子どもについての専門機関との連携（項目13）に関する項目で、得点平均が4.00以上で高かった。地域間比較では、不登校の子どもへの対応（項目4）に関する項目で、有意差が見られた。多重比較の結果、西北が三八に比べ、必要性認知が高かった。

進路面については、得点平均が2.00以下で低い項目は見られなかった。一方で、心身に障害をもつ子どもへの進路不安（項目4）、問題行動をおこしている子どもへの進路指導（項目5）、心に悩みをもつ子どもへの進路指導（項目6）に関する項目で、得点平均が4.00以上で高かった。地域間比較では、有意差は見られなかった。

⑥定期的な心理的支援に対するニーズ

定期的な心理的支援に対するニーズの平均値、標準偏差、および、その地域間比較（分散分析、多重比較はTukey HSD法）の結果を表13に示す。

得点平均は3.77であった。地域間比較では、有意差は見られなかった。

4. 考察

(1) 現在、受けている定期的な心理的支援の実態、および、定期的な心理的支援に対するニーズ

現在、定期的に心理的支援を受けているのは202校のうち、63校であった。心理的支援を受けている割合は、東青、下北で有意に高かった。支援の頻度は、約半数の学校が隔週以上毎週末、約2割の学校が毎月

表11 「学校に対する心理的支援」の必要性認知の概要

		地域						分散分析		
		東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計	F値	多重比較
必要性	n	29	51	29	11	37	38	195	.66	
学習面	平均値	3.89	3.78	3.87	4.09	3.84	3.68	3.82		
<平均>	標準偏差	.70	.72	.88	.48	.72	.80	.74		
必要性	n	29	51	27	12	36	40	195	1.27	
心理・社会面	平均値	4.25	4.09	4.11	4.26	4.25	3.90	4.12		
<平均>	標準偏差	.73	.66	.71	.66	.57	.90	.72		
必要性	n	28	50	26	12	38	40	194	1.13	
進路面	平均値	3.83	3.64	3.77	3.92	3.92	3.54	3.73		
<平均>	標準偏差	.83	.76	.79	.65	.90	.93	.84		

表12 「学校に対する心理的支援」の必要性認知の詳細の詳細

		地域						分散分析		
		東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計	F値	多重比較
学習面	必学7 授業中の学習態度のよくない子どもへの対応を考えると	n	29	51	29	11	37	40	197	1.76
		平均値	4.24	4.12	4.17	4.36	4.24	3.75	4.11	
		標準偏差	.87	.91	1.04	.50	.72	1.03	.91	
	必学9 心身に障害をもつ子どもの学習指導について考えると	n	29	51	29	11	37	40	197	1.35
		平均値	4.62	4.43	4.55	4.73	4.51	4.23	4.47	
		標準偏差	.68	.83	.63	.47	.69	1.00	.79	
	必学11 学習について援助を必要とする子どもの保護者とのように関わったらよいか分からないとき	n	29	51	29	11	37	40	197	.47
		平均値	4.28	4.04	4.07	4.09	4.24	4.05	4.12	
		標準偏差	.88	.92	.96	.83	.89	.85	.89	
	必学12 学習について援助を必要とする子どもがいて、児童相談所、相談機関、病院などの専門機関とどのように関わったらよいか分からないとき	n	29	51	29	11	37	40	197	1.93
		平均値	4.52	4.02	3.93	4.18	4.35	4.15	4.18	
		標準偏差	.78	.88	1.00	.75	.86	.92	.89	
心理・社会面	必心3 友人関係がうまくいかない、あるいは友だちがいないということで悩んでいる子どもへの対応について考えると	n	29	51	29	12	36	40	197	1.35
		平均値	4.34	4.20	4.24	4.42	4.44	3.95	4.23	
		標準偏差	.90	.89	.91	1.00	.77	1.04	.92	
	必心4 登校拒否（不登校）の子どもへの対応について考えると	n	29	51	29	12	36	41	198	2.29*
		平均値	4.66	4.49	4.79	4.58	4.64	4.20	4.53	
		標準偏差	.81	.78	.62	.90	.59	1.08	.83	
	必心5 無届の欠席や遅刻・早退が多くて気になる子どもの対応について考えると	n	29	51	29	12	36	41	198	1.23
		平均値	4.52	4.35	4.24	4.33	4.56	4.12	4.35	
		標準偏差	.87	.80	1.02	.89	.61	1.08	.89	
	必心6 心に悩みをもつ子どもへの対応について考えると	n	29	51	28	12	38	40	198	.48
		平均値	4.62	4.45	4.50	4.67	4.50	4.38	4.49	
		標準偏差	.78	.81	.69	.49	.69	.95	.78	
必心8 問題行動をおこしている子どもへの対応について考えると	n	29	51	28	12	37	41	198	.97	
	平均値	4.48	4.37	4.29	4.58	4.54	4.17	4.38		
	標準偏差	.91	.80	1.01	.67	.65	1.09	.89		
必心9 性の問題や異性とのお際のことで悩みをもっている子どもへの対応について考えると	n	29	51	28	12	38	40	198	1.80	
	平均値	4.38	4.06	4.11	4.33	4.32	3.80	4.13		
	標準偏差	.94	.90	1.07	.78	.74	1.16	.97		
必心10 家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応について考えると	n	29	51	27	12	38	40	197	.53	
	平均値	4.45	4.25	4.26	4.42	4.39	4.18	4.30		
	標準偏差	.87	.84	.86	.90	.72	.93	.84		
必心12 心理・社会面で援助を必要とする子どもの保護者とのように関わったらよいか分からないとき	n	29	51	27	12	38	40	197	1.32	
	平均値	4.38	4.10	4.26	4.42	4.45	4.05	4.24		
	標準偏差	.94	.83	.86	.67	.72	1.06	.88		
必心13 心理・社会面で援助を必要とする子どもがいて、児童相談所、相談機関、病院などの専門機関とどのように関わったらよいか分からないとき	n	29	51	27	12	38	40	197	1.15	
	平均値	4.52	4.18	4.26	4.25	4.45	4.13	4.28		
	標準偏差	.78	.82	.86	.87	.69	1.07	.86		
進路面	必進4 心身に障害があるために将来の進路に不安をもつ子どもがいるとき	n	28	50	27	12	38	40	195	1.05
		平均値	4.25	4.18	4.26	4.50	4.26	3.93	4.18	
		標準偏差	.97	.94	.90	.67	.79	1.02	.92	
	必進5 問題行動をおこしている子どもへの進路指導に困っているとき	n	28	50	27	12	38	40	195	1.49
		平均値	4.21	4.06	4.11	4.50	4.21	3.78	4.09	
		標準偏差	.99	.91	.97	.67	.96	1.10	.98	
必進6 不登校・心に悩みをもつ子どもへの進路指導に困っているとき	n	28	50	27	12	38	40	195	1.72	
	平均値	4.32	4.18	4.37	4.50	4.45	3.93	4.25		
	標準偏差	.98	.94	.79	.67	.76	1.10	.93		

*p < .05

表13 定期的な心理的支援に対するニーズ

	地域							分散分析	
	東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計	F値	多重比較
n	29	50	28	13	39	41	200	2.87*	
平均値	4.17	3.68	3.61	4.23	3.85	3.46	3.77		
標準偏差	.89	.87	.96	1.01	1.01	.95	.96		

* p < .05

以上隔週未満であった。支援者の職種はほとんどがスクールカウンセラーであった。これらの結果から、小学校に対する心理的支援は隔週、あるいは、毎月程度の頻度で来校するスクールカウンセラーを中心として担われていると考えられる。また、支援者の保有資格

は臨床心理士と教育カウンセラーが多かったが、わからないという回答も多かった。

小学校の設立主体がすべて、国公立であったことから、スクールカウンセラーは自治体（主に県）の判断によって任用されていると考えられる。よって、心理

的支援を受けている割合が東青、下北で有意に高かったのは、自治体による判断が影響を及ぼしていると考えられる。また、支援者については、青森県においては、スクールカウンセラーの正資格者応募資格として、臨床心理士、精神科医、大学教員が挙げられているにもかかわらず、支援者の保有資格のうち、これらに該当する資格は、81回答中16回答しかなかった。このことから、支援者の保有資格という点からは、小学校に対する心理的支援の質は十分ではないと考えられる。この背景には、そもそも、青森県にはスクールカウンセラー正資格者の主な担い手である臨床心理士が少ないということがある。日本臨床心理士資格認定協会（2013）によると、2013年における青森県の臨床心理士数は113名であった。平成25年の国勢調査の都道府県別人口を参考に人口10万人当たりの臨床心理士数を算出したところ、青森県は8.46人で47都道府県で最下位であった（全国平均は19.54人）。

(2)「学校に対する心理的支援」の認知度

「学校に対する心理的支援」の認知度を、学習面、心理・社会面、進路面、それぞれの全項目得点の平均値で見ると、いずれも得点平均は3.00以上であった。その中でも、心理・社会面では得点平均が3.73で高かった。また、地域間比較では、学習面、心理・社会面、進路面、いずれについても、概ね、東青が三八に比べ、認知度が高かった。各項目得点の平均値で見ると、2.00以下の項目は学習面、心理・社会面、進路面、いずれでも見られなかった。一方で4.00以上の項目は学習面で1項目、心理・社会面で4項目であった。つまり、心理・社会面で認知度が高かった。

以上のことから、小学校では心の問題を抱えている子どもへの支援を中心として、「学校に対する心理的支援」が認知されていると考えられる。つまり、臨床心理学的支援が「学校における心理的支援」の核として認知されていると考えられる。そもそも「心理的支援」が不登校支援、発達障害への対応といった臨床心理学支援を中心になされてきた（千原，2009）ために、「心理的支援」が臨床心理学的支援として認知されていると考えられる。今後、支援者が心理・社会面に限らず、学習面、進路面への心理的支援を実践、発信していくことで、学習面、進路面への認知度も高まると考えられる。

(3)「学校に対する心理的支援」の経験

「学校に対する心理的支援」の経験を、学習面、心理・社会面、進路面、それぞれの全項目度数の平均値で見ると、心理・社会面、学習面、進路面の順に度

数平均が高かった。その中でも、心理・社会面では経験率がほぼ.20で高かった。各項目の経験率で見ると、経験率が.05以下の項目が進路面で7項目、経験率が.20以上の項目が学習面で3項目、心理・社会面で6項目であった。つまり、心理・社会面の支援で経験率が高い一方で、進路面の支援で経験率が低かった。石隈（1999）は、日本においては進路面への心理的支援が十分でないという印象を述べたが、本研究の結果はこれを裏付けるものである。

心の問題を抱えている子どもに関連する項目を中心に行っているという点は、認知度と経験率で共通の結果であった。つまり、小学校の心理的支援においては、支援のどの側面がより認知されているかにより実践されているかが一致している。認知度について考察した際に述べたように、心理・社会面での支援がこれまで積み重ねられてきたため、心理・社会面での支援の認知度が高かったと考えられる。一方で、進路面での支援はこれまでほとんど実践されてこなかったため、進路面での支援での認知度が比較的lowであったと考えられる。進路面の支援の経験率が低かったことについては、そもそもニーズがないため、進路面の支援が実践されてこなかったという可能性も考えられる。しかし、進路面の支援については、その必要性認知の全項目得点の平均値が3.73であったことから、ニーズがないために実践されてこなかったということではないと考えられる。つまり、支援者が小学校関係者のニーズを十分に汲みとれてこなかったために、進路面の支援が十分に実践されてこなかったと考えられる。

(4)「学校に対する心理的支援」の必要性認知

「学校に対する心理的支援」の必要性認知を、学習面、心理・社会面、進路面、それぞれの全項目得点の平均値で見ると、いずれの面も得点平均は概ね4.00で、必要性認知は高かった。各項目得点の平均値で見ると、2.00以下の項目が見られなかった一方で、4.00以上の項目が学習面で4項目、心理・社会面で9項目、進路面で3項目であった。つまり、いずれの面でも必要性認知は高かったが、とくに心理・社会面で必要性認知が高かった。この結果は、石隈（1999）、中島ら（1996）の結果と一致する。

必要性認知は全般的に高く、心理的支援に対するニーズは高いと考えられる。とくに、心理・社会面の支援の必要性が高い。心理・社会面の支援が中心にあるというのは、認知度と同じ傾向であった。この背景には、「心理的支援」がそもそも、臨床心理学的支援を中心として認知されていることがあると考えられ

る。現状においては、学習面、進路面の支援の認知度がそれほど高くない一方で、それらの必要性認知は高かった。このことから、学習面、進路面について、小学校関係者は支援の具体像をそれほどイメージできていないが、支援の潜在的ニーズは感じていると考えられる。

(5) 各地域の特徴

認知度については、概ね、東青が西北、上北、三八に比べ、認知度が高かった。経験については、他地域に比べ、東青の経験率が学習援助を必要とする子どもについての保護者との連携に関する項目（学習面項目11）、心に悩みをもつ子どもへの対応に関する項目（心理・社会面項目6）で、また、下北の経験率が心に悩みをもつ子どもへの対応に関する項目（心理・社会面項目6）で高かった。東青については、統計的な結果は得られていないが、進路面以外の項目で経験率が他地域に比べ比較的高かった。必要性認知については、地域差はほとんど見られず、全般的に得点平均が高かった。

東青については、心理的支援の経験率が高いだけでなく、現在、定期的に心理的支援を受けている割合も他地域に比べて高かった。よって、東青は他地域に比べ、小学校に対する心理的支援が盛んであると考えられる。実際に支援を受けている、あるいは受けたということが、心理的支援に対する認知度を高めたと考えられる。一方で、下北も東青同様、現在、定期的に心理的支援を受けている割合が他地域に比べ高かったにもかかわらず、経験率は心に悩みをもつ子どもへの対応に関する項目（心理・社会面項目6）以外では他地域に比べ高くなかった。これは、下北における小学校に対する心理的支援が心に悩みをもつ子どもへの支援を中心に行われており、それ以外の支援がそれほど行われていないためであると考えられる。

東青と下北において、経験率が高かったのは、定期的支援が盛んであるからであると考えられる。心理的支援の担い手のほとんどがスクールカウンセラーであることを考えると、定期的支援がどれほど盛んであるかはスクールカウンセラーの任用元である自治体の判断によると考えられる。東青と下北で心理的支援の多様性が異なる（東青ではさまざまな面の支援が行われているのに対して、下北では心に悩みをもつ子どもへの支援が主となっている）背景には、地域の都市機能の違いがあると考えられる。東青は県庁所在地である青森市を含む地域であり、もっとも都市機能が充実していると考えられる。一方で下北はもっとも人口が少

ない地域であり、都市機能はそれほど充実していないと考えられる。都市機能が充実しているほど、人材も豊富であり、心理的支援の方法も多様になると考えられる。事実、定期的に心理的支援を行っている支援者の保有資格（表5）を見ると、下北は臨床心理士が0であった。そのような都市機能の違い、ひいては人材の豊富さの違いが、東青と下北の間に心理的支援の多様性の違いを生じさせたと考えられる。

(6) 今後に向けて

さいごに、本研究の結果、明らかになった2つの知見、それぞれから導かれる実践的示唆を述べる。

本研究の結果、明らかになった第一点目は、学習面、進路面の支援に対する潜在的ニーズがあるにもかかわらず、学習面、進路面の支援があまりなされていない点である。潜在的ニーズがあるとは、支援を受ける小学校関係者自身が支援のニーズを感じてはいるが、そのニーズを満たすような支援の具体像はあまり認知していないということである。近年、学校教育において、学力向上、キャリア教育の重要性が高まっており、学習面、進路面の心理的支援の重要性も今まで以上に高まってくると考えられる。今後は、学習面、進路面の心理的支援について、支援者側から支援のいくつかのモデルを提供することも重要であるが、それ以上に、小学校関係者がどのようなニーズをもっているのかを丁寧にききとり、そのニーズに合わせた形で支援のあり方を提案、実践していくことが重要であると考えられる。本研究の結果、明らかになった第二点目は、都市機能の違いに応じて、心理的支援の多様性が異なる点である。もし、都市機能の違いと心理的支援の多様性を媒介する要因として、人材の問題があるとするれば、人材育成、つまり、支援者の育成がまず重要となると考えられる。今後、支援者が学校に対する心理的支援の多様性を理解するとともに、多様な支援方法を身につけ、そういった支援を実践していくことが重要であると考えられる。

謝辞

本研究をおこなうにあたり、質問紙調査にご協力いただきました小学校関係者のみなさまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

安達知郎（2015）. 教員による心理教育実施に関する実態調査—青森県の学校教員を対象として—. 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, 11, 28-36.

- 千原美重子 (2009). 学校臨床心理士の発達支援に関する研究—活動内容, 連携, 緊急支援についての分析—. 奈良大学紀要, 38, 127-136.
- 伊藤美奈子 (1999). スクールカウンセラーによる学校臨床実践評価ならびに学校要因との関連. 教育心理学研究, 47, 521-529.
- 石隈利紀 (1999). 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助チーム. 誠信書房.
- 文部科学省 (2014). スクールカウンセラー等配置箇所数, 予算額の推移. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/11/14/1341643_1.pdf (2016年1月5日取得)
- 文部科学省 (2015). 「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」(チームとしての学校・教職員の在り方に関する作業部会 中間まとめ). http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/07/28/1360375_02.pdf (2016年1月5日取得)
- 中島義実・原田克己・草野香苗・太田宣子・佐々木栄子・金井篤子・蔭山英順 (1997). 義務教育現場における教員の期待するスクールカウンセラー像. 心理臨床学研究, 15, 536-546.
- 日本臨床心理士資格認定協会 (2013). 臨床心理士数と指定大学院・専門職大学院数一覧. <http://fjcbcp.or.jp/shinrishasuu/> (2016年1月11日取得)
- (2016. 1. 15 受理)
-
- ⁱ 本研究は, 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室で企画した「学校に対する心理的支援」ニーズ調査事業の一環として実施した。